

よく“大船に乗った気持ち”というが、意味や使い方はともかく船は大きいほどに安全ということが語源であろうと思う。わが愛艇もヨットとは名ばかりで長さ20フィート(6メートル)、クルーザーというキャビン付のタイプでは最小だ。30年まえの若かりしときにガラス繊維にプラスチックをしみこませて作った自作艇で、小船なのに愛着だけは大きく今更手放して大型艇に乗り換えるなんてことはできない。小船は中も狭く使いにくく、対候性も悪い。

海辺での遊びであれば取り回しも良く少人数でも楽しめるのだが、長距離のクルージングの場合、船は大きいほどに、乗組員は多いほど安心安全といえる。

昔この大きさのヨットで太平洋を渡った人がいたが、どの世界でも冒険家とは人並み外れた偉才の持ち主で、我々の想像をはるかに超えるものだと思う。



(三浦半島・三崎に係留している我が愛艇)



(ヨット遊びに来てくれた山なかまシリウスの仲間と)

自分の力量はどのくらいのものなのだろう。単独で伊豆諸島三宅島位までは行けるような気がする、新島までは二度行ったがその先は未到であった。長年の課題が残されていた。今年こそはと一念発起、というよりは来年はさらに困難になろうとの思いから大好きな山歩きも休み、この航海にかけたのだった。

5月は気温もよく快適なのだが午後になると強風を覚悟せねばならず、梅雨時、海は静かだが視界が悪く雷の心配もあり、少々暑くても海が穏やかな太平洋高気圧が張り出す頃と決めたのだが今年の気候は少し変わっていた。台風は少なかったが夏の高気圧が東西に分かれ関東の南海上はほんの少し気圧が低い状態となり、太平洋から湿った空気が流れ込み関東以北は安定せず梅雨が長引いた。

待てば海路の日和あり。テレビの気象予報では8月4日から1週間位晴れマーク、天気安定、梅雨明け宣言も出て早朝6時三崎を出港、たった独りのさみしい船出だった。

穏やかで風波は無かったが多少のウネリがあり遠くに低気圧があることを知らせていたが、まずは心配ないだろうと思う。所々に雲はあったが視界は良く、今日の目的地、伊豆の大島もすっきりと青紫に見慣れた島影を見せて洋上に浮いていた。城ヶ島大橋には富士山の雄姿がかかり、東には千葉の鋸山、富塚山、館山、洲崎が、相模湾に出ると丹沢、大山、江の島、進むにつれて今出てきた城ヶ島や、三崎の山々が次第に小さくなっていった。

思えばこのヨットが完成してから28年大島航路は十数回に及ぶがその都度何かしらのわけがあってその先には行けず年を重ねるごとに体力、気力が低下し、風や波の揺れ、真夏の日射に耐えられるのか心配事も増え、以前のように我武者羅に出かけられないのである。船の整備も済ませ天気待ちの状態

なのに、身支度や食糧買い出しに体が動かないのだ。何かの理由を見つけ、出港を遅らせ又は取りやめたいもう一人の自分がある。少しの恐怖心も仲間と日取りを決めたのであれば何としても出かけるのだが、一人であるから行きたくなければ止めれば良い。だが、敗北感に苛まされる今後を考えればともかく行けるところまでと気持ちを奮い立たせバッグに必需品を詰め込んで梅雨明けと同時に8月3日船中泊、翌4日出発したのだった。血圧は160を越え脈拍も高く心配もあったが、今を置いてほかにないと清水の舞台から飛び降りる思いの決断だった。

いざ出かけてしまえば長年やってきた手慣れた航海に身も心も落ちつきを取り戻し、船数も少ない静かな相模湾の一人旅を楽しんだ。時折、鳥山(海鳥が海面で群れている所)の近くを通過すると一斉に飛び立った海面はざわめいてカツオやイナダに追われた小魚たちが命からがらと逃げ回っている。流れ過ぎて行く水の透明度は高いのだが水深が深いため青黒く波切泡だけが白い航跡を長く残していく。真夏の強烈な日差しは新しく作ったオーニング(日よけのテント)に遮られ海面を渡ってくる涼しい風が頬をなで気分爽快、

青紫に見えていた島影が次第に大きくなり一部に緑が混ざり始めるといよいよ来たのだと何時もながら感激する。ああ、これが幸せというものか・・・？。待てまて、着くまでは何があるか分からず気は抜けない。入港準備の為、船内から錨を取り出し、デッキの前に行ってセールを下す作業中にいきなり気分がわるくなった。やっぱりきたか。1時間ほど前に食べた五目稲荷、賞味期限本日11時、ぎりぎりOKだったが日向に転がしてあったのが気になり半分食べたが妙にウマイので全部食べてしまったのがいけなかった。肝心な時にこれなんだから！船側から顔を出して思いっきり吐き出す。とんだドジを踏んだ。

港口の灯台をすり抜け懐かしくも見慣れた噴火口湾の波浮港に入る、少し船が少ないような気がする。いつもの場所に錨をおろし槍付け(船尾から錨をおろし船首を岸壁に舫う)停泊、真夏の太陽に熱せられた灼熱地獄の岸壁に降り立った。

この2年間で島はさらに疲弊していて港の商店街にはかき氷の店が一軒と立て直した寿司屋があるだけ、山の上のスーパーも閉店し数あったクサヤ工房も仕事しているのかどうかわからない。湊寿司で昼食を済ませ、日陰を求めて街を散策して時間を過ごす。無事到着の一報を入れると南の海上にあった雲の塊が台風8号になって小笠原から日本列島の東海上を北上するとの事。しかしまだ遠いのであまり気にせず明日は予定通り式根島へ向かうことにした。

ガソリンや氷、食糧の補給を済ませ船内で軽い夕食をしてから寝床に入るとOさんから電話があり気象の話も聞き、無理せず早めに三崎へ帰還することにしたのだった。この台風は伊豆諸島の近くを通るので島の港でやり過ごすには少々危険があった。二日も帰りを遅らせれば風は北東に変わり“吹いた山瀬が別れ風”ともなりかねず、悔しくもまた敗退の憂目をみることになった。

8月5日朝、舫いを解いて船尾から錨を上げるべくロープを引くが何故か重いのである。他船のロープや何か我がロープの上に架かっているのではと思うも他に船はいないし、何故か、なぜかと思いつつ重い錨を引き上げた。

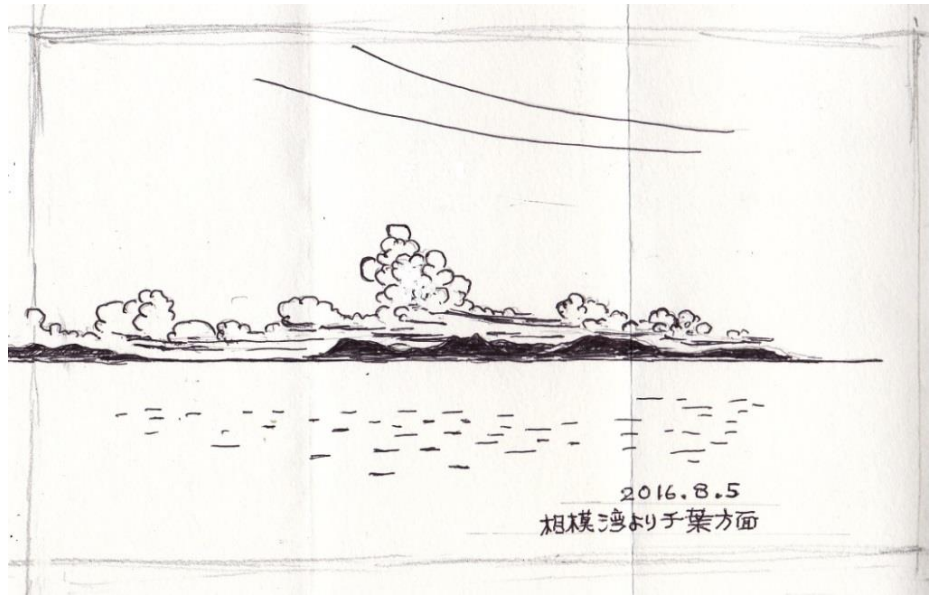
自分の力がなくなったのだとは理解しなくなかったが他にはなかった。歳を取ったのだ！！軽いショックを胸の奥に飲み込んで、セールを上げて帰途に就く。体力の減少は、これを自覚せずに同じ作業をすれば腱鞘炎や膝痛、腰痛などを引き起こす。さりとて自身に鞭打って筋トレするのも強い意志や精神力が求められ、若き日のように普通に動いていれば維持ができるという年代は悲しいかなもうすでに遠ざかってしまったのだ。

ヨット仲間の中には、もうギンギンに挑戦せず近場でゆったりと風に任せ、オーディオでも取り付けて音楽を聞きながらのんびりと過ごすのがよい、という意見もある。

いまだに単独航海に挑戦すべく大島航路を走っているのは 是なのか 非なのか。三崎に帰れば疲労困憊だろうに。そんなことも忘れてまたいつの日か同じコースを来るのだろうか。

見慣れた島が雲の中に消えてゆき、前方には千葉の低い山々に太平洋からの湿った空気が上昇気流となって雲をつくらせ内陸に向かってゆっくり、ゆっくりと流れている。

(挿絵 筆者)



2016.8.5
相模湾より千葉方面

(丁)